

# 快適に差がつく、気密のイロハ。

**で**  
でんき  
通して、  
くうき通さず。

コンセントの取り付け部

コンセントはできるだけ、外に面していない壁に設けます。外に面する壁に設置が必要な場合は、コンセントの器具外側に気密ボックスを使用し、気密性を確保します。

**は**  
はい管も  
“気”を抜かない。

床を貫通する配管

給排水配管やエアコン配管が床を貫通する場合は、床板部分にシーリング処理をして気密性を確保します。一般的なスウェーデンハウスで10箇所以上の配管にこうした気密施工をします。

**え**  
えんの下の  
高气密。

基礎部分の点検口

ユニットバスの床下には点検口があります。スウェーデンハウスでは、特許取得したオリジナルの点検口キャップで塞ぐことで気密性を確保（※）。一般的な住宅では、気密の配慮がされない部分です。  
※北海道は、別仕様となります。

**あ**  
あいた  
口を  
ふさぐ。

気密性の高い窓とドア

家の中で最も熱が入りするのは、開口部。ここが疎かでは困ります。スウェーデンハウスの開口部には、建具の気密性能試験で最高等級A4（防音・断熱・防塵建築用）の気密性能を備えた窓・ドアを採用しています。

空気の抜け道になりやすい部分を、見逃さないのが快適の決め手です。

**す**  
すみまで、  
すきなし。

壁パネル同士の直角な接合部

省エネルギー住宅の気密施工では、防湿気密フィルムを重ねる場合は3cm以上の幅で重ねるよう指導されています。気密性の弱点になりやすい出隅・入隅（壁パネルを直角に接合する部分）も同様の指導ですが、スウェーデンハウスでは、更にこの上から防湿気密フィルムを重ね張りして気密性を高めています。

**く**  
くうきは  
ご遠慮いたダクト。

外壁を貫通するダクト

外壁を貫通する給排気ダクト部分には、フランジ（円筒の周囲についているツバ）付のアダプターを採用。フランジ部分と透湿防水シートを防水気密テープで留め付けて防水性と気密性を確保しています。

**き**  
きみつの  
秘密は  
フタにあり。

床下点検口などのフタ

床下点検口や床下収納には、枠の部分に気密材を設けた気密・断熱型のフタを採用しています。

○ 気密のスキを許さないのが、スウェーデンハウスの基本。

住宅の省エネ性や快適性を得るためには、断熱・気密・計画換気の相乗効果がとても大切です。気密性が低いために隙間から勝手に空気が出入りすれば快適な温度は保てず、せっかくの断熱も無意味になってしまいます。また計画的に空気の流れをコントロールすることができないため、換気システムによって空気の質を良好に維持することもできません。そこでスウェーデンハウスでは快適性を高いレベルで実現するため、パネル同士のつなぎ目や配管・配線の部分など、住まいのあらゆる部分に気密性能を高める配慮をしています。

スウェーデンハウスは、気密性の高い窓や、気密フィルムを挟み込んだ壁パネルなど、基本部材から優れた気密性能を備えています。だからこそ施工時に様々な配慮を加えることで、家全体として、より高い気密性能を実現できるのです。

スウェーデンハウスは、オーナー様の目が届かない細かな部分までも気密性能を追求しています。

○ 高性能な住宅をお届けしたい。いつもその思いは変わることなく。

こうして高いレベルで実現した気密性能を証明するのが、お引き渡し時のC値の全棟測定です。このC値測定は、高性能を証明することに加え、もっと気密性能を高めよう、という開発・施工現場のモチベーションにもなっています。また施工現場からは、更に気密性能を向上させるための意見も随時フィードバックされています。

一般的に商品開発と言いつと、まず目標とする性能値などを定めます。その際、目標を越える性能はオーバースペックであり不要、という発想をするケースが少なくないようですが、スウェーデンハウスは全く違う考え方をします。快適な暮らしのために、気密がどれほど重要かを知っているからこそ、常に今できるベストを尽くす。そうした姿勢を、スウェーデンハウスは創業以来30年間、変わることなく持ち続けています。